# 坂田寺跡第７次調査　現地説明会資料　1991年11月2日

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

◎所 在 地：明日香村大字阪田字古宮　◎奈良県の遺跡地整備事業に伴う遺構確認調査
◎調査期間：1991年9月2日～継続中　◎調査面積：約320㎡（東西45m、南北7～11m）

**<坂田寺について>**

坂田寺は、渡来人鞍作氏の氏寺であり、豊浦寺と並ぶ飛鳥時代の代表的な尼寺である。坂田寺の創建については、司馬達等が継体天皇16年（522）に坂田原に結んだ草堂や、鞍作多須奈が用明天皇２年（587）に建てた寺と丈六仏を前身とし、その子鞍作止利が鞍作一族の功績と飛鳥大仏を堂内に収めた功によって賜った水田で、金剛寺（坂田寺）を造ったと伝える。また、天武朝末年の朱鳥元年（686）には、大官大寺、飛鳥寺、川原寺、小墾田豊浦寺とともに無遮大会を執り行ったとの記事が見えるなど、当時、重要な役割を占める寺の一つであったことが判る。

奈良時代には、坂田寺尼信勝の活動が注目される。特に、天平勝寶元年（749）の東大寺大仏東脇侍観音菩薩像の寄進は特筆され、同時に西脇侍仏を寄進したのが法華寺尼善光であることからすると、坂田寺もまた法華寺と並ぶほどの隆盛を当時誇っていたことが判る。ただ、その後の経緯は明らかでなく、承安２年（1172）に多武峯の末寺となり、15世紀には興福寺の末寺となって坊舎８宇、衆徒10人を持っていたことがうかがえる程度である。

**<これまでの調査の概要>**

第１・２次調査（1972・1974年）では、７世紀前半代の池跡、７世紀後半代の溝・土坑、８世紀前半代の石組溝などを検出した。このうち８世紀の石組溝は、真北から約15度西に傾く方位を以てＴ字形につながり、その南端には井戸があった。石組溝からは、金剛寺を表わすであろう「金」や「知識」「真」と記した墨書土器が出土した。井戸をほぼ同位置で掘りなおした９世紀前半代の井戸からは「口田寺」「厨」の墨書土器が出土し、この場所が坂田寺の附属施設であることが確認された。

第３次調査（1980年）では、８世紀後半に造営された西面する仏堂が発見され、これが８世紀前半の石組溝と同様、北で約15度西へ振れる方位を持った坂田寺の主要伽藍の一部であることを確認した。基壇の中央には須弥壇が設けられ、鎮壇具が埋納されていた。第４次調査（1982年）では、西面する仏堂と同じ方位の石組（玉石積み基壇の一部と推定）を検出し、第５次調査（1985年）では、鎮壇具を埋納した土坑を新たに検出した。

昨年実施した第６次調査では、８世紀後半の仏堂が玉石積みの二重基壇を持つこと、それに回廊が取り付くこと、それらが10世紀後半に倒壊廃絶したことを確認した。

**<今回の調査成果>**

今回の調査地は、昨年検出した南面回廊の西延長部分である。調査の結果、調査区の西へなお延びる南面回廊を検出し、回廊で囲まれた伽藍の形態が、地形からの推定通り、正方形に近いものであることが確認された。

南面回廊は今回新たに15間分を検出した。昨年検出分の２間を合わせて、東南隅の間を含めて17間以上の規模になる。回廊は梁行１間の単廊で、柱間寸法は桁行梁行ともに３ｍ（10尺）である。礎石は径60～90cmの花崗岩の自然石で、地山を浅く掘りくぼめ、柱筋方向に長軸をとって据えられている。基壇は両側の雨落溝を地山岩盤を削り出すことで成形し、礎石を据えた後に薄く基壇土にあたる砂質土を積んでいる。

回廊の南（外側）には幅2.0m、深さ0.3mの雨落溝があり、その外は急傾斜面で丘陵にいたる。溝は改修を経た後に10世紀後半代に埋没したとみられ、その後の土砂崩れによって回廊倒壊時には基壇上にまで土砂が迫っている。当初の溝の縁石については前回と同様、定かでない。回廊北（内側）の雨落溝は、幅1.6m、深さ0.3mの規模で、内部には厚く砂が堆積し、その上に建物部材を含む有機質層が覆っている。一部ではあるが礎石の心から1.2mの位置で回廊の基壇縁石にあたる護岸の石を確認しており、回廊内側の溝には縁石があったものと考えてよい。軒の出が内外とも同じとすると、回廊基壇幅は5.4mとなる。回廊北雨落溝の内側は人頭大の石が敷き詰められている。なお、第６次調査区の西端にあった石組施設は、大型の石を内法1.2mの方形に組んだものであったことを確認したものの、その機能と性格については明らかでない。

**<遺　物>**

瓦・土器・施釉陶器・鉄釘・建築部材などがある。瓦が大量にある以外、他はきわめて少量である。建築部材を除けば、回廊外側から流入した遺物がほとんどである。回廊部材には、頭貫・梁・柱・斗・桧皮などがある。桧皮は柱や頭貫材の下に厚く堆積しており、回廊が桧皮葺きであったことは確実である。瓦は、７世紀前半から平安時代までのものがあるが、前回同様、回廊建物建立時（８世紀後半）のものはなく、７世紀後半から末のものと、奈良時代末から平安時代初めの瓦が多い。回廊雨落溝が埋没したのち、丘陵側から土砂崩れによって流入したものであって、回廊に使われていたものではない。丘陵上にあったと推定される別の堂塔に葺かれたものであろう。土器には土師器・須恵器・黒色土器があり、土師器では奈良時代前半から平安時代にかけての灯明皿が多い。施釉陶器には緑釉・三彩があり、三彩は器種が不明であるが唐三彩とみられる。このほか、金箔を貼った漆製品の断片、ガラス玉などが丘陵上からの流入土から出土した。

**<まとめ>**

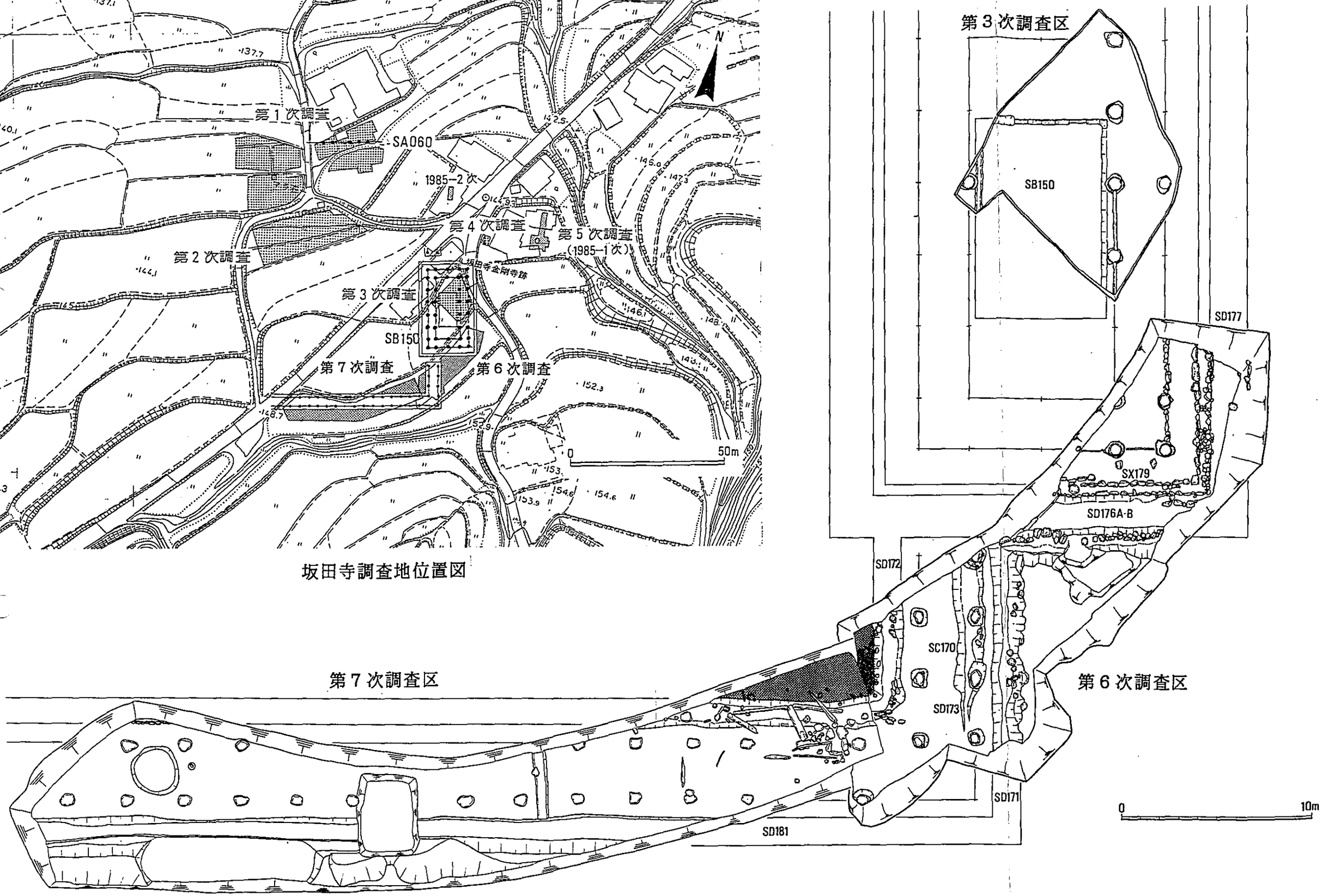
今回の成果は、南面回廊の規模が隅から17間以上であることが確認されたことである。調査地周辺の地形からすると、回廊は19間以上には延びないと考えられ、その東西幅は51ｍ以上57ｍ未満となる。回廊の南北幅は昨年までの調査から58ｍ程度と推定されており、回廊で囲まれた空間は、ほぼ正方形に近い形になり、その規模も地方の国分寺クラスに等しい。この回廊内側の空間は、堂、塔、あるいはその両者を入れるに十分な規模であるが、８世紀後半の寺院では堂塔の無い例も多いので、結論は今後の調査を待たねばならない。

回廊は８世紀後半の仏堂にやや遅れて造営されるが、外側（南）の雨落溝は10世紀後半までに埋没している。その後、調査区の西寄りでは大きな土砂崩れなどが起きて、回廊背面の排水が滞り、回廊東南隅部は水没状況になったと推定される。これを解消するため、土砂崩れの部分にのみ溝を掘るが、これもすぐに埋没し、回廊の柱にまで土砂が押し寄せた状況だったらしい。そして、10世紀後半、回廊は倒壊する。

土砂崩れによって形成された高まりには多量の瓦類や基壇土の一部と思われる山土のほか、金箔を貼った漆製品の断片やガラス玉が含まれており、丘陵上に瓦葺きの堂塔が存在したことを暗示する。出土した瓦は奈良時代前期のものと奈良時代末から平安時代初めのものが主体をしめており、丘陵上の施設は仏堂・回廊の建立以前に建てられ、回廊倒壊時までともに存在したと考えられる。回廊内の堂塔の存否、奈良時代の坂田寺の伽藍全体の構成と関わって興味深い。

第1次調査
SA060
1985−2次
第4次調査
第5次調査
(1985−1次)
第2次調査
第3次調査
SB150
第7次調査
第6次調査
N
0
50m

坂田寺調査地位置図


第3次調査区
SB150
SD177
SX179
SD176A·B
SD172
SC170
SD173
SD171
SD181
第7次調査区
第6次調査区
0
10m